

第61号

2021.12.15

島根高P連だより

発行
編集

島根県高等学校PTA連合会事務局

松江市黒田町538 TEL/0852-22-8602 FAX/0852-22-8735

E-mail: shimakp@orange.ocn.ne.jp URL: https://shimakp.jp/

全国高P連大会島根大会特集



泉満全国高P連会長 挨拶



丸山達也島根県知事 歓迎の挨拶



記念講演 小泉凡氏



記念公演 佐野史郎氏 山本恭司氏



大屋光宏実行委員会会長 閉会の挨拶



受付の様子

目次

- 2 「苦しいときのPTA活動」 島根県高P連会長 飯塚 大幸
全国高P連団体表彰校実践報告 出雲商業高校PTA
- 3 全国高P連団体表彰校実践報告 江津高校PTA
全国高P連表彰(個人)受賞報告 松江工業高校前PTA会長 野々村 卓也
- 4 令和3年度島根県高等学校PTA連合会研修会
- 5 令和3年度 県教委との意見交換会
世界大会出場 島根中央高校力ヌ一部 会長激励費贈呈
- 6 「第70回全国高P連大会島根大会開催協力のお礼」
島根大会実行委員会会長 大屋 光宏
第70回全国高P連大会島根大会概要(全体会)
- 8 第70回全国高P連大会島根大会概要(分科会)
- 10 令和3年度 島根県幼こども園・小中・高・特別支援PTA合同研修会



大会シンボルマーク



大会ポスター



大会要項

苦しいときのPTA活動

～全国高P連大会島根大会の御礼～

島根県高等学校PTA連合会会長
(島根県立松江北高等学校PTA会長)

飯塚 大幸

皆様には日頃からPTA活動へご参加ご協力いただき誠に有り難うございます。二年にわたるコロナ禍により長らく停滞していたPTA活動も少しずつ動き出しています。予断は許しませんが今後でもできることを地道にやっけていきたいと思っています。

本年八月二十五日、第七〇回全国高等学校PTA連合会大会島根大会が予定通り開催されました。一年延期を乗り越えて、わずかなスタッフが集まった島根県民会館から全国に向けてライブ配信されました。当日の会場はリアルでした。丸山島根県知事様、上定松江市長様を始めとする来賓の方々、泉全国高P連会長始め役員諸氏、次年度開催の石川県高P連諸氏、講師の小泉凡様、公演の山本恭司様、そしてアトラクションの松江商業高校吹奏楽部、浜田商業高校郷土芸能部の生徒さん、それぞれステージ上から心を込めて一生懸命に発信していただきました。やむなく会場に来られない方とは収録映像でのコラボレーションあり、前撮りされた六つの分科会の映像も斉にYouTubeに公開されました。色々な心配があった中、よくぞ大過なくここまで出来たと思える肅々とした感動的な大会だったと思います。

本来ならば、全国から多くの参加者を迎え、

教育的にも経済的にも、島根県のPRという観点面にも大きな期待がありました。しかし、苦しいときのPTA活動。ここまで綿密に完成度の高いオンライン開催をやつてのけた島根大会は、今後の大会のあり方に石を投じたかと思っています。配信された映像は美しく質の高いもので、分科会はその内容の濃さに賛辞の声が寄せられ、ネット上のアーカイブは今も閲覧され、もっと広く会員で共有したいというリクエストもあると聞いています。

これもひとえに島根県高P連の会員の皆様のご理解とご協力によるものです。また多くの関係者の皆様方のご尽力お力添えによるものです。特に大屋実行委員会会長には五年間も、事務局の皆様には七年以上にわたり綿密に携わっていただきました。あらためて心より深く御礼を申し上げます。なお、オンライン視聴は本年十二月三十一日までです。まだご覧になっていない会員の皆様には是非アクセスしてみてください。

年末年始を迎え、本年度も残り少なくなってきました。本会のPTA活動が、今後子どもたちの成長を支え、参加する皆様のよき学びの場となりますように、引き続き、会員の皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

全国高P連団体表彰校実践報告

出雲商業高校のPTAの取り組み

島根県立出雲商業高等学校 PTA会長

今岡 正和

令和三年八月二十五日に開催されました「第七〇回全国高等学校PTA連合会大会島根大会」において、本校PTAは全国高P連会長表彰(団体の部)をいただきました。これまでの会員の皆様のご努力によるものと、大変喜んでおります。

本校PTAは、会長一名、副会長四名、監事四名の九名を中心として、各学年二十名程度評議員をお願いし、年間を通じて活動を行っています。

PTA活動は、三つの専門部(委員会)で構成され活動をしています。それぞれの委員会の主な活動を紹介いたします。

「生活指導委員会」では、毎年九月中旬から行われます秋の交通安全運動の街頭登校指導に合せて、登校の時間帯に立ち、マナー指導と挨拶運動を行いました。交差点に立ち、挨拶する前に生徒皆さんから大きな声で「おはようございます」と声を掛けられる場面が多く見られました。参加された保護者の皆様からは、「とてもさわやかな朝を迎えられることができました」とうれしくなる声を聞くことができました。

「斐校の会」では、斐校祭(体育祭)にて、熱中症防止対策として給水所を設営し、生徒の皆さんに運動前後の給水を促す活動を行っています。設置された給水所には、多くの生徒の皆さんが訪れて競技種目結果の感想や意気込みなど保護者役員の皆様と交わされる



PTA研修会

光景が見られました。また、秋のPTA研修事業では、学年を越えた交流が研修を通して行われました。

「商業委員会」では、委員会のメンバーを中心に、毎年十一月初旬の二日間で開催される出商デパート(大規模販売実習)の後方支援として、食堂や物品販売等の運営などに携わりながら生徒の皆さんの助力になればと活動を行っています。食堂では、うどんやカレーの仕込みや盛り付けなどの調理補助を交代制で手伝っていただきました。この仕込みも来客数と相談しながらの作業で大変でしたが、おかげさまでましまして完売することができました。

この二日間の催しものは、学校の体育館をメイン会場として、県内外の物品を取り扱っての販売活動や食堂イベントの運営など、日頃、子どもたちが学んでいることが実践できる場として行われています。この場面を通して、いきいきと取り組んでいる子どもたちの姿を見ることができました。その様子は、普段、家庭では見られない真剣なまなざしと日常では体験できないお客様との接客を通じた大きな声の挨拶が体育館の中から響き、活気を感じました。

今回の受賞に際しましては、島根県高P連をはじめ関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。



出商デパート:調理補助



出商デパート:食堂 盛り付け

全国高P連団体表彰校実践報告

江津高校のPTAの取り組み

島根県立江津高等学校 PTA会長

益野 敬好

令和三年度第七〇回全国高等学校PTA連合会大会島根大会において、本校PTAは「全国高P連会長表彰」(団体の部)で表彰していただきました。誠に光栄のことと思います。これまでの会員の皆様の活動が認められ、大変喜んでおります。

本校PTAは、会長一名、副会長三名、監査員二名を中心に、約二十名の評議員で構成された役員をもとに活動しています。PTAが設立されてからさまざまな活動が行われてきましたが、近年は生徒数の減少に伴う会員数の減少もあり、大きな活動は「奉仕作業」「ロードレース豚汁作り」の二つになつてしまいました。

毎年八月に実施するPTA奉仕作業では、保護者だけでなく、生徒・教職員も一緒に



親子そろって奉仕作業

なつてグラウンドを中心とした敷地内の除草作業を行います。九月に実施される体育祭を気持ちよく迎えてほしいという思いから始まったもので、例年会員の三十%程度が参加しています。

また、十一月に実施される「健康ロードレース大会」での豚汁作りは、ゴールした生徒の頑張りやねぎらう気持ちから始まりま

した。毎年好評でかわりをする生徒が続出するため、生徒数の三倍程度の量を作りま

す。調理をしながらの保護者同士での情報交換も楽しみの一つです。



豚汁求めて長蛇の列

このように、本校PTAの取り組みは生徒や教職員を巻き込んだもので、お互いの顔が見える一体感のある活動となっています。これからも、このよさを失うことなく活動していきたいと思っています。

今回の受賞に際しまして、島根県高P連をはじめ関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

全国高P連表彰(個人)受賞報告

「助け合いの重要性」

島根県立松江工業高等学校
前PTA会長

野々村 卓也

全世界が予想もしなかった新型コロナウイルスの脅威により私達の生活様式も一変しました。島根大会の延期も私にとってPTA役員として全国大会島根大会の立ち上げから関わり八年間の集大成の場でもありましたので複雑な思いもありました。しかし本年、オンライン形式ではありましたが開催の運びになったことは喜ばしいことであり、これまで大会運営にご尽力頂いた皆様方には感謝しかありません。そして今回「全国高等学校PTA連合会会長表彰」を頂き身の引き締まる思いと同時に、PTAに関わって頂いた方すべての代表としての表彰であることにあらためて感謝致します。

私は松江農林高校、松江工業高校の二校でPTA会長として関わってきました。松江農林高校でのPTAとして一番待ち遠しくなるのが秋の収穫祭になります。九月から企画、運営を考えていく中で当日の役割に対して保護者の皆さんに毎年多数参加して頂いた事に感謝させられ、これからの活動の原動力となりました。PTA活動はボランティア精神で展開しています。

近年PTA組織の必要性についてよく聞くことがあります。会費の問題・組織に対する役割の負担等様々な意見を聞く中、私たちは家庭または社会の一員として常に助け合いながら生きています。私自身多くの方々に関わ

り、体験をする中で日本が承継し伝統として培ってきた「共助」を支える、助け合いの文化の必要性を学んだように思います。松江農林高校、松江工業高校のPTAを歴任し校長先生をはじめ教職員の皆さん、PTAでお世話になったすべての方々、県高等学校PTA連合会の皆さま方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



表彰式の様子

令和三年度 島根県高等学校PTA連合会研修会

令和三年度島根県高等学校PTA連合会研修会は十月二十三日(土)にくびきメッセ国際会議場で島根県との共同主催、企画山陰中央新報社という形で実施した。テーマは「高校生の保護者向け就活セミナー」で、子どもが島根県で就職を考えるときに背中を後押ししてもらうよう、高校生の保護者に県内の企業の魅力を知ってもらうという開催した。三部構成で、第一部は島根電工株式会社代表取締役社長の荒木恭司氏に「地元採用を積極的に行う理由」という演題でご講演をいただいた。その後、第二部で企業PRコーナーに移り、第三部で気になった企業のブースを訪問・質問する形で行われた。当日は県内の各地より三十六名の高P連会員の参加があり、子どもの就職を親も一緒に考える機会となった。



研修会の様子

参加企業

島根電工(株) 協栄金属工業(株)
協和地建コンサルタント(株) サン電子工業(株)
島根トヨタグループ セコム山陰(株)
(株)中筋組 (株)ミツノ モルツウェル(株)

以下は、第一部の講演の概要である。

「地元採用を積極的に行う理由」

島根電工(株)社長 荒木恭司氏

① 大切にしているもの

会社の経営者として一番大事にしているものは「社員とその家族」である。一番目は「取引業者とその家族」、二番目が「顧客」、四番目が「地

域」、五番目が「株主」と考えている。なぜ、顧客が一番ではないのか。まず、顧客を満足させるのは社員である。社員が元気でないとお客様を感動させることはできない。「社員の満足なくして、顧客の満足無し」と考えるからである。二番目の「取引業者とその家族は、取引する会社の社員もそしてその家族も幸せになしてほしい」と思うからである。地域貢献はボランティア活動することだけではない。雇用が一番の地域貢献だと考えている。雇用した社員に給与を払い、その社員が地元でお金を使うことで、雇用が地元の活力となり、地域貢献となる。

「株主が一番」という考え方はアメリカのノーベル経済学賞受賞者のミルトン・フリードマンが唱えた「市場原理主義・金融資本主義」の考え方である。この株主第一主義や業績第一主義の考え方は業績が悪化する経営者はリストラを行い、給料を下げる。これでは、社員とその家族の生活は苦しくなり、幸せにならない。「リストラをして業績が回復した」という報道もなされるが、これはおかしい。社員を解雇したらその社員と家族はどうなるのか。社員を景気の調整弁に使うことには反対だ。また、我が社では正社員と同じ仕事をしている契約社員やパートの給料が違つことも是正した。さらに、契約社員の希望者三十人を正社員にした。すると社員に活気が出てきて、業績も向上した。社員とその家族は財産である。入社したての若い人は「仕事が入っている、いない」で悩むことも多い。家族も心配する。そこで、入社後三年までの社員の家族を呼んで懇談会を毎年開いている。会社と家族と一緒に若く若い社員を育てる体制を作っている。離職率を抑え、若者を社会人として育てることも企業としての地域貢献だと考えている。

② 働きやすい職場作り

働きやすい職場作りは離職を防ぐために重要だ。「売上第一」だけを追求すると社員は苦しくなるので、過重労働にならないように受注量も考えている。社員の悩みを解消することも大切で、「ビッグブラザー」(新入社員に三年間、兄弟役をつける)制度を導入し、悩みを聞く体制を作っている。忘年会、新年会、社員旅行、運動会も行ったり、ランチホールという自由にお茶を飲んだり昼食をとる場所を作った。残業はできるだけ少なくしたい。残業しなくても生活できる給料を出す。平成二十二年に週一回「ノー残業デー」を始め、平成二十八年からは週三日(月・水・金)を指定した。すると火・木も残業が早くなった。残業は上司に申告し、上司が許可を出す。何をするか、何時間するのかを確認し、「無理だ」と判断すれば誰かが手伝う体制にした。顧客との打合せは、「上司が行き先を指示する」形から自分で決める体制へと変えた。「サツくん」という五〇分で見積もりがでるプログラムを作り、以前であつたら顧客の「コンセプト」一個注文したい」という問合せに即答できなかったが、「サツくん」を導入し、現場で即答できるようにした。これにより社員の自主性が上がり、やりがいもいっそう感じるようになった。プレミアムフライデー(月末の金曜日)には、午後三時に仕事を終える仕組みを作った。最初は三千三百円を支給し、「必ず、その日に使うこと」を約束に領収書は不要とした。現在は四千円にしている。



島根電工(株)荒木恭司社長の講演

③ 企業が求める人材とは

テストで高得点をとるよりも、嬉しい時には一緒に喜び、悲しい時には悲しむような心豊かな若者が求める人材だ。悩んでいる人がいれば何かあったの」と家族のように接する子を我が社は求めている。世間では、まだ試験の成績がよい子を求めているが、これはおかしい。IQ(知能指数)よりもEQ(心の知能指数)を大切にしたい。新入社員には「何のために働くのか、生きるのか」を語り、考えさせている。

終わりに

大手企業では「株主が一番」「業績第二」という理念でリストラや工場閉鎖も行われる。景気がよければ採用し、悪くなるとリストラする企業も多い。島根県には喜びや悲しみを共有し、社員を大切に、「地元採用は地域貢献になる」と考える会社も多い。もっと地元の企業のことを高校生や保護者に知ってもらいたい。

参加者の感想

・各企業の取り組みや理念など、このセミナーでなければ聞けないことがあつても参考になりました。子どもに直接聞かせたかったので、一緒に話が聞けるとよりよかったです。

・島根電工の荒木社長の「従業員第二」という思いが心に響きました。自分の子どもも、島根電工のような従業員のことを親身になつて考えてくれる企業で働いてほしいと感じました。

・島根には元氣な企業がたくさんあることを再確認できました。



Webページで
高校生の保護者向け
就活セミナーの
様子をより詳しく
紹介しています。

令和三年度 県教委との意見交換会

十一月十六日(火)に飯塚大幸会長以下二名の役員が教育庁で、県教委の野津建二教育長以下六名の職員と意見交換を行った。以下は、高P連役員との質問や意見に対する県教委の回答・意見等をまとめたものである。

「寄宿舎における新型コロナウイルス感染症対策について」

「いまね留子で他県から島根県の高校へ入学し、寮や下宿で生活をしながら学んでいる生徒も多い。夏休み等で帰省し、その後、帰県する場合、寮生の場合は部屋が四人一部屋が多く、食事も食堂で摂っており、感染を防止するため保護者や本人から希望があった場合に十四日間程度、旅館やホテルでの宿泊費を県が負担し、健康観察を行う体制にしている。」「いまね留学生やその保護者の島根へ帰県したときの「いつ」たらどうしよう」という不安も大きい。なお、下宿生の場合は基本的に一人部屋で生活しており、他の下宿生との接触も防ぐことができると考えており、旅館やホテルで滞在した場合の県費での費用負担は想定していない。現在のところ、県内の公立高等学校の校内で感染が拡大した事例はなく、これからも保護者の協力も得て感染対策をしっかりと行い、生徒の健康と学びの保障を確保したい。

「ヤングケアラーについて」

「ヤングケアラー」とは通学や仕事のかたわら、障がいや病気のある親や祖父母、年下の弟妹などの介護や世話をしている十八歳未満の子どものことを指す。介護のために学業に遅れが出たり、進学や就職を諦めたりするケースもあるという。実態を把握するため、令和三年一月に全国の中高生対象に初めて厚生労働省と文部科学省による抽出調査が行われた。それによると全国の公立中学二年生の五・七％、全日制公立高校一年生の四・二％つまり、約二十一人に一人が家族を世話している状況である。一方で「ヤングケアラー」は本人に自覚がなく、表面化しにくいとされ、約八割が自分を「ヤングケアラー」と認識していないという調査結果もある。学校ではヤングケアラーにも含め、困っている子どもたちに早めに気づき、教育相談等を行い、必要に応じて外部の子育て・医療・福祉関係者につなぐ体制を作っている。SSW(スクールソーシャルワーカー)が県内の県立高校四校に一人の割合で配置されているので、場合によってはSSWを派遣して、必要な支援につなげる体制を敷いている。「ヤングケアラー」という言葉や内容がまだ十分認知されていないので、教職員の研修も

行いながら、早めの気づきや生活支援につなげたい。

「校則について」

校則は生徒が心身の発達の過程にあることや学校が集団生活の場であることから、学校には一定のきまりが必要であり、学校が教育目的を達成するために必要かつ合理的な範囲内において定められるものとされている。また、学校教育において社会規範の遵守について適切な指導を行うことは重要であり、校則は教育的意義を有しているとされている。昨今の報道等においては学校における校則の内容や校則に基づく指導に関して、一部の事案において必要かつ合理的な範囲を逸脱しているのではないかとといった旨の指摘もなされている。文部科学省は六月にいくつかの取組み事例を示しながら、社会や時代の変化に合わせて校則を見直すよう都道府県教委に事務連絡を出した。県内の公立高校では昨年の十月から今年の九月までで校則を一部見直した学校は約半数であり、制服に関しては選択制にしている学校も増えている。また、生徒にアンケートを採ったり、生徒会で話し合いを行っている学校もある。学校を取り巻く社会環境は変化するため、校則の内容は生徒の実情・保護者の考え方、学校の歴史や校風、地域の状況・社会の常識・時代の進展等を考慮しながら、生徒の意見も取り入れつつ、生徒が主体的に守っていくことができるような校則の在り方を絶えず考える必要がある。

フリースクール

意見交換会の後半は、事前に題目を決めず、フリースクール形式で意見交換を行った。最初の話題はPTA役員に関するものであった。役員になる前は負担になるのではと心配したが、やってみると他の保護者や先生とのコミュニケーションの機会となり、環境美化活動や、学園祭やロードレースの手伝い等、学校行事に参加することで子どもたちの様子がよくわかる機会にもなり、やってよかったと思うという意見があった。二つ目の話題は、第七〇回全国高等学校PTA連合会大会島根大会(島根大会)についてであった。島根大会は大会史上初のネットでの配信方式で行われたが、映像も鮮明で内容もよかった。研修会に使いたいという問合せが他県から継続的に大会事務局へ来ており、関心の高さがうかがえる。新型コロナウイルス感染症の影響でこれからはハイブリッド型の大会が多くなると予想されるが、島根大会は一つのモデルになったという意見があった。



意見交換会の様子

IFCジュニア・U23カヌースプリント 世界選手権大会出場 会長激励費贈呈

県高P連では、当連合会に所属する高等学校の生徒やその生徒を指導する学校の指導者がスプリント競技会やコンテスト・審査会等の世界大会に日本を代表して出場する場合に、その栄誉を称え、健闘を期待して会長激励費を贈呈することになっている。今年度は、カヌー競技でポルトガルのモンテオ・ル・オウエーリョで開催されたIFCジュニア・U23カヌースプリント世界選手権大会に、日本代表として出場した島根中央高校カヌー部行田朋晃さん、齋藤哲一さん、小鍵亮太さんと指導者の堀田育子先生に八月二十六日(木)島根中央高校校長室で大屋光宏高P連顧問が激励費を贈呈した。出場種目と結果は次のとおり。

U18 K2 500m 齋藤・行田選手
15位(1分39秒54)日本代表チームの中で最上位
U18 K4 500m 小鍵・齋藤・行田選手



会長激励費贈呈式

準決勝進出(1分36秒7)に期待したい。齋藤哲一選手には、後述のようにポルトガル遠征時の手記を書いてもらった。競技会出場だけでなく、若い時代に世界の街を知り、新たな夢を描くことは大切なことである。県高P連としては、今後ともそんな子どもたちを応援したい。

甘さが出てしまった感じがしています。私達が、技術的にも体力的にも海外の選手の後半の強さを身につければ、十分世界で戦っていくことは可能であるという事も感じました。

私は、宮城県からカヌーで日本代表になり世界に挑戦したい」という目標を持って島根県に来ました。念願であった目標を叶えることが出来て本当に良かったと思っています。

コロナ禍の中、「大会が開催されるのか」「日本からポルトガルに遠征が許可されるのか」不安でした。しかし、みなさんの協力により遠征に必要な全ての事をクリアし、大会に出場できて本当に嬉しかったです。これも、日頃からお世話になっているPTAの皆様、先生方、地域の皆様、家族のお陰であると心から感謝しています。

この大会で学んだことを活かして、大学生になっても本気でカヌーに取り組んでいきたいと思っています。また、世界の大会で戦うことが出来るように頑張りたいと思います。

最後に、世界選手権大会という大きな大会にみなさんのお陰で出場できた事を忘れずにこれからの学校生活や寮生活をしっかりと頑張りたいと思います。そして、後輩達に、「本気で頑張ることの大切さ」「努力をすれば必ず目標は達成出来る」という事を伝えていきたいと思っています。後輩の中から、世界に挑戦する選手がたくさん出ることを祈っています。たくさんさんの応援を頂き本当に有難うございます。

カヤックフォアメンバー
(右から行田・齋藤・小鍵選手)

カヤックペア B決勝 6位

第七〇回全国高等学校PTA連合会大会

島根大会開催協力のお礼



第七〇回全国高等学校PTA連合会大会島根大会 実行委員会会長

大屋 光宏

第七〇回全国高等学校PTA連合会大会
島根大会は予期せぬコロナ禍による一年延期、度重なる開催方法の変更など本当に紆余曲折ありましたが、八月二十五日に大会を開催し大会旗を石川県に引き継ぐことができました。

コロナ禍により多くの行事が中止となり、PTA会員の学びの場も失われている状況での島根大会の開催でした。大会はオンラインでの配信・視聴としたため全国から会員のみなさんが集うことはできませんでしたが、例年より約四百校あまり多い全国加盟校約四千校の六割に参加していただくことができました。七〇回という節目にふさわしい大会となるとともに、島根大会の実施とその大会内容に対して全国の会員のみなさんより多くの激励と高い評価をいただきました。

島根県高等学校PTA連合会の会員のみなさんにおきましては、約七年近い準備となりました。その年度の現役の会員で準備を行って来まして、三十六校、約一万五千人の会員は、その都度その都度メンバーは代わりましたが、その時々一人一人が自分のこととして心配をさせていただき、準備に携わっていただき

ました。想いを引き継ぎ誰もが自分のこととして主体的に全国大会に取り組んでいただき組織としての力をいかに発揮できたことが、誰もが経験したことのないコロナ禍における大会開催につながったと考えています。

改めて長年の準備に関わっていただきました歴代の会員のみなさん、ボスター・シンボルマーク等のデザインに応募していただいた高校生のみなさん、運営等を支援していただいた業者のみなさん、大会に出演していただいた高校生はじめ会員のみなさん、ご指導いただいた島根県及び松江市をはじめとする自治体そして大会に協賛いただいた企業のみなさんに心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

最後になりますが、大会テーマは「ご縁つくり」でした。新型コロナウイルス感染症の終わりが見えず不安は多いと思いますが、全国大会に関わっていただいた「ご縁」や「経験」が今後の仕事、生活そしてPTA活動の一助になればうれしく思います。

なお、大会の視聴は十二月末までできますので、視聴いただきますようお願い申し上げます。



第七〇回全国高等学校PTA連合会大会

島根大会成功裡に終了

概要

第七〇回全国高等学校PTA連合会大会島根大会は、「ご縁つくり」新たな明日への礎のために」をテーマに八月二十五日(水)に島根県民会館で開催された。この大会は令和二年八月に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症のため今年に延期された。当初の計画では各会場半分の入場者数で開催予定であったが感染症の収束の兆しは一向に見えず、六月十二日の島根大会実行委員会、大会史上初の原則無観客・オンラインでの開催が決まった。オンライン開催であっても内容は通常開催にできるだけ近いものにするとし、分科会とそれに合わせて上演する高校生のアトラクションは事前収録、全体会はオンラインライブ配信とすることにした。全体会当日は、丸山達也島根県知事以下八名の来賓と泉満全国高P連会長以下十一名の全国高P連理事等の出席のもと、県内会員から人数制限して募った参加者五十四名、ボランティアの係員五十四名の協力を得て開催された。

大会日程

令和三年八月二十五日(水)

九:〇〇～九:二〇 各都道府県市連合会紹介(ビデオ上映)

九:二〇～九:三〇 アトラクション(松江商業高校吹奏楽部)

九:四〇～一〇:三〇 開会式

一〇:四〇～一一:〇〇 記念講演・公演

一一:〇五～一一:二〇 アトラクション(浜田商業高校郷土芸能部)

一一:二五～一二:〇〇 閉会式

一二:〇〇～

全体会映像配信(十一月三十日まで)

開会行事

飯塚大幸島根大会実行委員会副会長の開会の辞、国歌演奏の後、泉満全国高P連会長は「コロナ禍で社会が激変する中、当たり前が当たり前でなくなる。疑問に思わなかったことが課題に。あらゆる常識が聖域なく変化していく。このような複雑な時代だからこそ、PTAの底力が求められるのではないで



飯塚大幸実行委員会副会長「開会の辞」

しようか。」と全国の会員に呼びかけた。続いて、萩生田光一文科科学大臣のビデオメッセージ、来賓の丸山達也島根県

知事の歓迎の挨拶、開催市を代表して上定昭仁松江市長の歓迎の挨拶があった。例年であれば受賞者を招待し行う表彰式も各部門の代表の方だけご来場いただき、その中で、全国高P連会長表彰団体の部と個人の部を代表して、松江工業高校前PTA会長野々村卓也氏に表彰状が渡された。その後、受賞者を代表して全国高P連前会長牧田和樹氏が挨拶を行い「PTAというのは学ぶ場なんだ」ということを改めて認識した次第であります。とうか全国の高P連に関わっている皆様方、ぜひそういう学びの場としてのPTAも楽しんでいただけたらいいかなというふうに思っております。」と述べた。



上定昭仁松江市長 歓迎の挨拶



萩生田光一文科大臣 ビデオメッセージ

全国高等学校PTA連合会 会長表彰一覧(島根県関係)

団体表彰

・出雲商業高校PTA
・江津高校PTA

個人表彰(会務功)

・野々村卓也(松江工業高校)・塩野 稔昭(出雲工業高校)
・佐藤 龍美(島根中央高校)・豊田さゆり(矢上高校)
・志波 英樹(矢上高校)・加藤 淳子(事務局)

記念講演・公演

明治の文豪小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の曾孫の小泉八雲記念館館長小泉凡氏による「小泉八雲がみた日本の魅力」五



記念講演 小泉 凡氏

感でとらえた明治日本のすがた」と題した記念講演があった。その中で「ハーンは偏見をあまり持たずに、他者への公平で愛のあるまなざしオープンマインドを持って、山陰の古都松江での日々を送り、松江の文化や人々の暮らしは、今の世の中では「多様性」の大切さにつながることを見抜いていました。」と紹介された。

講演に引き続いて、松江とともに育った俳優佐野史郎氏とミュージシャン山本恭司氏の公演『小泉八雲朗読のしらべ』『八雲彷徨く神々の首都松江から』に移った。佐野氏は今春体調を崩されてまだ本調子でないことから、映像による出演となり、「飴を賣う女」鳥取の布団の話な

どの怪談を朗読し、続いて山本恭司氏のギター生演奏があった。

記念講演・公演後、前澤信也実行委員会副会長が謝辞を述べた。

アトラクション

開会式の前に松江商業高校吹奏楽部が「星影のエル」「川の流れるように」「September」の三曲を演奏し、会場を和やかな雰囲気包んだ。記念講演・公演の後には浜田商業高校郷土芸能部が石見神楽「大蛇」を勇壮に舞い、会場を盛り上げた。



松江商業高校吹奏楽部 演奏



浜田商業高校郷土芸能部「大蛇」

閉会行事

来年の大会は石川県金沢市で開催される。高P連旗が大屋光宏島根大会実行委員会会長から、泉満全国高P連会長に返還され、そして泉会長から村井繁夫石川県高P連会長に授与された。石川大会のPRビデオが流れたあと、栗田真人石川大会実行委員長が金沢市の会場からライブ中継で来年の石川大会への参加を呼びかけた。

その後、大屋光宏会長から大会閉幕にあたっての挨拶があった。大屋会長は大会に携わったすべての方たちに謝辞を表したあと、「今回の島根大会の大きなテーマは、縁という言葉でした。コロナ禍で大変な思いをされている人々、心を痛める場面も多かったと思います。八月に入り、台風、長雨と非常に辛いこと、そして受け入れ難い現実を目の当たりにする場面も多かったことと思います。今回の大会により育まれました縁が、少しでも皆様の生きる力、明日への希望へつながればうれしく思います。」と大会を締めくくった。最後に、今岡正和島根大会実行委員会副会長が感謝とともに閉会の辞を述べ、島根大会は終了した。



大会旗は次期開催県石川県へ

分科会

分科会は、七月二十六日(月)から二十九日(木)に大会運営を委託しているさんいん中央テレビ本社で前撮り録画を行った。どの分科会も基調講演をもとに、現在のそしてこれからの教育の課題に熱心にパネルディスカッションを行った。

また、八月十一日(水)に松江市のプラパホールで江津高校の神楽愛好会、出雲農林高校の出農太鼓部、三刀屋高校の演劇部のアトラクションの事前収録を行った。

第1分科会

テーマ・サブテーマ

「Withコロナにおける学校教育の形とこれからの学びのデザイン」
「予測不可能な未来を生きていくには」

基調講演講師は、(株)ベネッセコーポレー



基調講演の様子

第2分科会

テーマ・サブテーマ

「正しく怖がる」で創るネットとの「縁」
「SNS・スマホで絶対に失敗しない方法とは」



模擬授業の様子

シオン 教育情報センターセンター長の谷本祐一郎氏で、令和四年度から年次進行で実施される高校の新学習指導要領や大学入試制度の解説を行いながら「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」の育成の重要性について講演を行った。

続いて、授業デザイン研究所代表の三浦隆志氏が講師となり、生徒役六人に対して「困難な時代を生き抜くために、子どもたちにとって必要な学びとは何か？」をテーマに模擬授業が展開された。

第3分科会

テーマ・サブテーマ

「地域で育む未来への学び」
「教育の魅力化でひろがる新たなこ縁」

基調講演講師は、(社)地域・教育魅力化プ

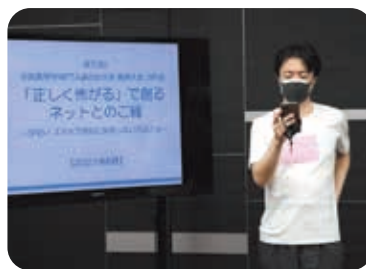
ラットフォー

ム代表理事
で島根県教育庁教育魅力化特命官の岩本悠氏で、島根県における「教育の魅力化」や「地域みらい



パネルディスカッションの様子

基調講演講師は、グリー(株) 社会貢献チームマネージャーの小木曾健氏で、インターネットが仕事や生活に不可欠な現代社会において、SNSやスマホを利用する上での注意点や失敗しない方法、失敗したときの対処方法までわかりやすい解説があった。



基調講演の様子

第4分科会

テーマ・サブテーマ

体験でつながる人々との「こ縁」
「人生100年時代」「不確かな時代」を生きるためのキャリアデザイン」

「留学」をテーマに、学校と地域社会がいかに連携・協働していくかについて講演があった。その後、パネルディスカッションに移り、コーディネーターとして認定NPO法人カタリバ代表理事の今村久美氏、パネリストとして県内高校の校長先生、地域みらい留学の卒業生、その保護者など七人がそれぞれの経験を交えながら高校の魅力化や学校と地域社会の連携、協働について意見交換を行った。

基調講演講師は、ノンフィクション作家の中村安希氏で、「とにかくやってみる」を演題に四十七カ国を巡る旅やアメリカや香港の大学での留学など自己の経験をもとに、「とにかくやってみる」ことの大切さを説いた。パネルディスカッションは、島根大学准教授の丸山実子氏をコーディネーターとして、



パネルディスカッションの様子

前全国高P連会長、県内高校の校長先生と卒業生がパネリストとなり、キャリアデザインについて議論が活発に行われた。

第5分科会

テーマ・サブテーマ

グローバルにつながる教育とのご縁
「SDGs（持続可能な開発目標）」と
新たな明日への礎のために

基調講演講師は、関西学院大学SGU招聘客員教授の久木田純氏で、国連職員として世界各地で勤務しその時の経験を交えながら、「地球と私たちの未来：二十一世紀の生き方とSDGs教育」という演題でSDGsについてわかりやすく講演をいただいた。コーディネーターは島根大学准教授香川奈緒美氏で、四人のパネリストによるディスカッションが行われ、各国の教育制度にも目を向け、現代社会の様々な課題の解決につながる多様な価値観や行動を生み出す取り組みなどについて議論があった。



講演講師(中央)とパネリスト

第6分科会

テーマ・サブテーマ

未来社会に対応するための教育とのご縁
「主体的・対話的で深い学び」や
「学校と社会の連携・協働」のあり方

基調講演講師は、独立行政法人教職員支援機構理事長の荒瀬克己氏で、「生徒を主語にした学校づくりに向けて」と題した講演を行った。

その後、島根大学教授泉雄二郎氏をコーディネーターとして、荒瀬氏、

(株)エブリブラン執行役員の石田学氏、出雲高校PTA会長の杉浦弘明氏、出雲商業高校PTA

A会長で高P連副会長の今岡正和氏、そして内閣府審議官の合田哲雄氏もリモートで加わり、五人のパネリストがディスカッションを行った。



基調講演の様子



パネルディスカッションの様子

アトラクション

分科会のアトラクションは、八月十日(水)にフラバホールで事前収録を行った。

江津高校の神楽愛好会の「八岐大蛇」が第1・2分科会、三刀屋高校演劇部の「永井隆物語」が第3・4分科会、出雲農林高校出農太鼓部の「新七兵衛太鼓」と「彩」が第5・6分科会のアトラクションとして配信している。



三刀屋高校演劇部



出雲農林高校出農太鼓部



江津高校神楽愛好会

この大会を通じて全国高P連、各県高P連をはじめ、オンライン参加をいただいた各都道府県の会員の皆さま、島根県内のコロナ禍の厳しい状況にもかかわらずご参加いただいたご来賓・全国高P連役員・県内役員・県内一般参加会員の皆さま、係員として参加いただいた会員の皆さま、この苦境をはねのけてでも、何とか良い大会にするよう惜しみない協力をいただいた関連業者・地方自治団体の皆さま、たくさんの方々の支えがあつて、乗り切れた大会でした。ありがとうございました。

全体会と分科会は十一月三十一日(金)まで視聴できますので、大会HPからアーカイブ配信に入り、各学校の研修会等でご活用いただければと思います。

また、島根大会の詳細については令和四年月頃発行予定の「報告書」でご覧いただけます。全ての方への配付はできませんが、大会HPにも掲載いたしますのでご覧ください。

(島根県高P連事務局長 勝部昌幸)



「子どもの成長に親としてどう寄り添うか？」

子どもと向き合う時に大切にしたいこと

令和三年度島根県幼・こども園・小中・高・特別支援PTA合同研修会

十月二十七日(土)、松江市の八雲アルパホールを会場に、幼こども園・小中・高・特別支援学校のPTA会員一四
五名(高P連関係三十名)が参加し、研修を行った。講師
は島根大学教職員大学院准教授宮崎紀雅氏で、「子ども
の成長に親としてどう寄り添うか」「子どもと向き合う
時に大切にしたいこと」というテーマでご講演をいただ
いた。以下にその概要を報告する。

「子どもの「困り感」に気づき、支えていくためには

（二）発想の転換をしよう

親が子どもに困っていると、子どもが何に困っているだろうか」と発想を変え、子ども主体で考えるとき、子どもの困り感がわかる。子どもの「困り感」は三つに分類できる。

①自己コントロール(行動・動作・感情)に困っている
例えば、靴紐を結ぶことに困っている。

②人とかかわり(攻撃・逃避・注目)に困っている。

例えば、けんかをしてしまう。

③情報の処理(出力・入力・記憶・思考)に困っている。

(二)子どもの特性(強み)を活かそう

子どもの認知の特性 例え、右脳(左利き) 視覚性タイプでは、絵や図で考え、見たり、書いたりを好む。一方、左脳(右利き・聴覚言語性)タイプでは、言葉で考え、聞いたり、読んだりを好む。人間は話す動物なの

で、左脳が発達し人類の九割は左脳タイプ・右利きである。子どもの中には左利きで生まれたが右利きになっている場合もあり、右脳タイプの特性が現れる。子どもの特性を理解して活かしていくことが大切である。

(三) 不快感情を受け止めよう

思春期に自分のしんどさを上手く言葉で伝えられない子どもがいる。大人の役割は、子どもへの頑張りや工夫をどんどんほめながら、子どもが感じている感情を察知して、適切な言葉に結びつけてあげる。例えば「しんどいね」「うかったんだね」「なやまなやまの気持ち」

を代弁する。少しずつ子どもが自分の言葉でちゃんと声に出して感情を伝えるようになることが大切である。

「二」思春期をどう支える？

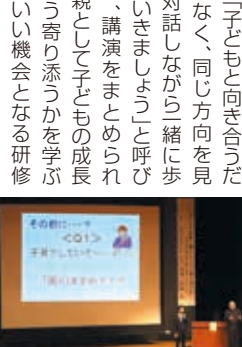
思春期は、子どもにとって揺れ動く危うさの時期である。子どもへの心も体も接する社会も揺れ動き、不安定な状態が続く。親にとって子どもが「長いトンネルの中に隠れてしまふ時期」である。子どもの行動がつながり、想いにくく、子どもの思い(考え、悩み)が見えにくい。

人は二回生まれる。一回目は母親の身体から生まれ、〇
十歳の間に子どもの自我も親の自我の中で「お母さん
が嬉しければ私も嬉しい」と感じながら身体も心も成長
する。二回目は親の自我からその子どもの自我が分離す
る。思春期の十二〜十八歳の間に、二次性徴、第二反抗
期や自分探しを経験しながら自分創りを行う。そして十
九〜二十四歳の「後思春期」に自分の自我を持ち社会へ出
る。思春期の時は、子どもが感情をありのままに表出し、
親は受け止めることが大切である。

「三」子どもを育てるシステム

基本姿勢は、子どもに任せて待つことである。親が困っているのではなく子どもが困っていると発想を換えてみる。子どもの不快感情を表出させ、共感しながら受け止める。子どもと次どうしたいか、一緒に考える。親も子育てしながら成長させてもらっていると考えよう。

最後に、宮崎先生は参加者に「子どもと向き合う」だけでなく、同じ方向を見て、対話しながら一緒に歩んでいきましょう」と呼びかけ、講演をまとめられた。親として子どもの成長にどう寄り添うかを学ぶのにいい機会となる研修会であった。



研修会の様子



研修会の様子

関西へ進学される学生さんへ!

見学お待ちしています!

島根県育英会館 入寮生募集中心!!

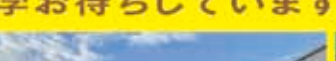
大阪府およびその周辺の大学・短大・専門学校に在学中の島根県在住の19人の学生が、寮を囲みながら、小規模の共同生活の中で親身に関わりあう寮生活を送っています。
 大学等が授業科目で忙しく、寮が生活の中心となる生活環境が実現できる寮環境です。

食費 **35,000円** / 共有費 **4,000円**、食費 **23,000円** (いずれも月額)
※入寮料、入寮費 150,000円 (寮費初年度は2年分以下は120,000円) がかかります。

【応募条件】
 学校教育法に基づき(大学・短大・大学校・高等専門学校(4年生以上)・専修学校(専門課程のみ))
 (以下「大学等」といふ)に在学または進学予定の島根県出身者、ただし、大学等の過半数及び夜間部は除きます。
 (進学予定者で、入学が決定していないでも応募は可能です。)*詳細は条件は育英会館のホームページをご確認ください。

【施設概要】
 〒555-0812 大阪府吹田市千鳥丘58番10号
 TEL 06-6877-3058
 2003年築/鉄骨コンクリート3階建/食堂70室(男女)/全館冷暖房
 専用バス・バス・バス・バス(食堂)/学習室/浴室/談話室/コイン
 シャワー室/洗濯室 第1ラウンジ・第2ラウンジ・洋館5階・パソコン
 設備・洗濯乾燥機・収納庫)

【アクセス】
 JR大阪駅・浪千早五駅(15分) JR神戸駅・浪千早五駅(50分)
 JR東新駅・浪千早五駅(25分) JR千早五駅下道徒歩15分







事務局だより

第七〇回全国高等学校PTA連合会大会
島根大会は、関係の皆様、会員の皆様のご協
力を得て、オンライン開催の形で開催できま
した。ありがとうございました。「内容がい
いと好評されていますが、改めて
ネット配信されているものを視聴し、記念講
演や分科会で印象に残った言葉を拾って見
ました。

●小泉八雲はオープンマインドという精神を唱えました。このオープンマインドは一人一人の違いや異文化、新しい概念や多様性に、偏見や先入観を持たずに接していくことです。

●インターネットは全部家の外です。スマホもパソコンもインターネットにつながっているものは全部家の外です。玄関ドアに書いて貼れないものは、ネットに書けません。

● 直接目標に向かう人はそんなにはない。いやってみる「積み重ね」の中で、自分が何に向いているか、向いていないか、だんだん輪郭を持ってデザインされていく。何かに「みる」「誰かと会って」「うろたえる」「なにかにキャリアデザインの着眼点がどこかにある」。

●SDGsは現在の課題を分類して示したもののだが、将来の仕事もそこにある。地球はだめになつてしまふ」という悲壮感ではなく、「この課題を解決すれば、未来が来る」といふふう希望を持って課題解決へのわくわく感を持って進めたい。

●時代に教育を合わせるのではなくて、時代を教育がリードする状況になってきた。これからは生徒を主語とした学びが行われ、その教育を受けた人が時代を作っていく。

新型コロナウイルス感染症の終息が今年も見えませんが、日本国内は落ち着いたかのようには見えませんが、世界的にはオミクロン株が広がっています。一刻も早く終息し、来年こそは明るい年になることを願わずにはおられません。よい年をお迎えください。